

Charichari



シェアサイクルと一緒に SDGs しませんか？

Charichari x Sustainable Development Goals

**Would you like to join us
in the SDGs by the share cycle?**



- 03 What's Charichari ?
ーただのシェアサイクルではない？ー

Special Feature

シェアサイクルと一緒に SDGs しませんか？

- 06 シェアサイクル x SDGs 2つのキーワード
「日常移動」と「垂直統合」

Charichari's SDGs Practice

- 07 SDGs Practice / すべての人に健康と福祉を
シェアサイクルでウェルビーイングな生活を
- 08 SDGs Practice / エネルギーをみんなに、そしてクリーンに
お客さまと一緒に実践していく SDGs ライフスタイル
- 09 SDGs Practice / 働きがいも経済成長も
お客さまの時間もお金も無駄にしない SDGs ってホント？
- 10 SDGs Practice / 産業と技術革新の基盤を作ろう
IoTでサステナブルな新しい都市インフラへ
- 11 SDGs Practice / つくる責任、つかう責任
自転車を楽しめるからこそ！ロングライフな自転車づくり

<SDGs Talk Session>

SDGs に取り組む企業と考える、持続可能な社会の作りかた

- 13 東海テレビ放送株式会社
SDGs に「気づく」きっかけ作りをする企業へ
- 17 株式会社丸井グループ
SDGs 実践への第一歩は「共感と行動のギャップを埋める」
- 21 九州朝日放送株式会社
地球規模ではなく、身近な地域にこそ SDGs はある



What's Charichari ?

—ただのシェアサイクルではない？—

国内最速で成長している
シェアサイクル

「まちの移動の、つぎの習慣をつくる」を理念に、
福岡をマザーシティとして展開しています
2020年からは名古屋・東京でもサービスを開始しました



約3年で600万回の ライドを達成！



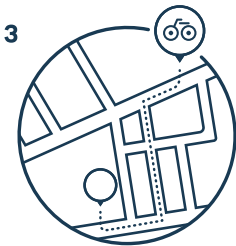
チャリチャリの使い方



1 チャリチャリをみつける



2 QRコードで鍵をあける



3 駐輪ポートまでライド



4 鍵をしめて終了!

IoT を活かした 快適な移動体験を提供する シェアサイクル

チャリチャリ (Charichari) は、スマートフォンアプリで専用の赤い自転車の鍵を開け、かんたんにご利用できるシェアサイクル。1分単位の料金、エリアを絞った高密度なポート展開でいつでもどこでも、気軽に移動できる利用体験の提供を目指しています。

neuet は「まちの移動の、つぎの習慣をつくる」をミッションとし、シェアサイクルという SDGs と繋がり深い事業を通して、その考え方をサービス設計や運営、自転車に反映させております。



? そもそもシェアサイクルとは

日本では、関東圏や関西圏を中心に全国 225 都市以上の都市で展開され、観光産業の推進や公共交通の補完として地域ごとに様々な事業者が運営しています。

近年では、密を避けた移動手段の一つとして、更にデリバリーワーカーの急増により改めて自転車移動に注目が集まっており、駐輪ポートがバス停や駅と同じように移動のポイントとして利用されています。

また、現在国内で約 7000 万台以上と言われている自転車保有台数の増加による駐輪場の確保や放置自転車等の課題、マイカー利用の増加による都市部の交通渋滞等、都市部の課題を解決する手段としても活用が期待されています。

シェアサイクルと一緒に SDGs しませんか？

2015年9月の国連総会で採択された

持続可能な開発目標“SDGs”。

昨今この言葉が至る所で耳にするようになったけれど、

どれだけ具体的に実践できているだろうか。

シェアサイクルの視点から

チャリチャリが実践するSDGsを伝えつつ、

持続可能な社会を作るためにネクストアクションを起こしたい。

私たちとサステナブルな未来に向けて

一緒に考え、行動しませんか？



Charichari の SDGs を知る 2つの視点

KEY WORD-1 : 日常移動 x SDGs



チャリチャリは「都市型シェアサイクル」です。多様な移動ニーズが存在する都市部ならではの交通課題を、チャリチャリで解決します。

お客様の多様な利用ニーズに合うようサービス設計されており、観光やデリバリーワーカーだけでなく、短距離移動での自転車ニーズを生み出し、より日常に近いシェアサイクルとして展開をしています。

3 すべての人に
健康と福祉を



7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



8 働きがいも
経済成長も



KEY WORD-2 : 垂直統合 x SDGs

Charichari

設計

製造

管理

運営

サービス提供



チャリチャリは、自社で車体の設計、製造、管理、運営を行うことでより持続可能性の高い交通インフラとしてまちの移動を支え、SDGs への貢献度を高めることから垂直統合の事業モデルにこだわります。

9 産業と技術革新の
基盤をつくろう



12 つくる責任
つかう責任





シェアサイクルでウェルビーイングな生活を

SDGs Practice / すべての人に健康と福祉を

シェアサイクルで カラダにもココロにも健康を

日常的な移動を自転車移動にシフトすることで、エコだけではなく健康維持に役立つということは過去の研究でも明らかにされています。

一般財団法人日本自転車普及協会の研究においても、サイクリングにはメタボリックシンドロームの予防・改善効果をもたらす可能性のあること、ランニングと比較してもより多くのエネルギーを消費できることがわかっております。

また、ランニング等と比較しても足や腰に負担をかけにくい運動であることから障害予防の観点からも推奨できるスポーツであるといえます。

近年注目のポタリングでは、サイクリングで散歩のように目的地を決めずに気分や体調に合わせて周辺をめぐることで、街中で新しいお気に入りのお店を見つけたりしてより楽しいライフスタイルを過ごすこともできます。



日常移動から持続可能な社会を作る

チャリチャリは「都市型シェアサイクル」です。多様な移動ニーズが存在する都市部ならではの交通課題を、チャリチャリで解決していきます。お客さまの多様な利用ニーズに合うようサービス設計されており、観光やデリバリーワーカーだけでなく、短距離移動での自転車ニーズを生み出し、より日常に近いシェアサイクルとして展開しております。



シェアサイクルは移動エネルギーの効率化、環境負荷の低減が可能な移動手段。必要以上のマイカーや公共交通機関の移動をシェアサイクルにシフトしていくことでCO2削減、環境負荷の低減につながっていきます。

お客さまと一緒に実践していく SDGs ライフスタイル

SDGs Practice / エネルギーをみんなに、そしてクリーンに

お客様と一緒に 毎日の移動をクリーンに

チャリチャリの平均のライド時間は年間を通じて 11～12 分で推移。日々のちょっとした移動で多く利用されています。また、福岡市ではチャリチャリを通勤通学に利用している人も多く、日常に溶け込んだシェアサイクルになっています。

毎日の移動にシェアサイクルを使う人が増えれば、積み重ねて環境負荷の低減に大きく寄与することができます。

チャリチャリはお客様と一緒に低炭素社会を実現していくことができるサービスだと自負しています。

雨のちときどき SDGs ?

雨が降った朝は電車やバスで通勤して、帰りは晴れていれば自転車で帰宅、ということもシェアサイクルであれば実現できます。

天気や気分に合わせて、気軽にチャリチャリで SDGs を実践できることも魅力です。





お客さまの時間もお金も無駄にしない SDGs ってホント？

SDGs Practice / 働きがいも経済成長も

お客さまも企業も笑顔になるサービス構造

チャリチャリにより、電車やバスの箱型移動だけでまかないきれない移動導線を補完することで時間のロスをなくし、継続的な生産性の向上の基盤となります。通勤やお仕事中の移動など「働く」中での移動の効率化は持続可能な経済成長を促進します。

利用する人のお財布に優しく、時間も有効利用いただけるサービスです。





SDGs Practice /

産業と技術革新の基盤を作ろう

IoTでサステナブルな
新しい都市インフラへ

自転車は 200 年の歴史の中で、ここ 100 年はかたちが変わっていない。そこに IoT の技術が加わることで、チャリチャリは従来の箱型移動でまかないきれない移動導線の補完を行い、都市の葉脈としての持続可能な交通インフラの整備を行い産業改革を目指します。



自社運営による採算性の向上、お客さま体験の質向上

お客さま体験の質を低下させる「自転車の偏り」や「整備不良」。neuet では、これらを解消するためのトラックでの再配備やメンテナンスを自社運営することによりコストを下げるができます。採算性を向上することで事業の継続性を高めるよう努めています。

また、自社運営のメリットとして、制約をなくし柔軟に動けること、現場のフィードバックをすぐにサービス改善に活かせることが挙げられます。特に、車体の改善にまちの状況を反映させることができるのは、neuet ならではであり、よりよいお客さま体験に繋がっています。

お客さまの移動が垂直統合の一部となる、
サービス設計

本来、「垂直統合」という言葉の中にお客さまは含まれませんが、チャリチャリは「まちの皆さまとつくる」サービス構造を意識して設計されており、お客さまの日常の移動が、自然と運営の一部を担う工夫がされています。

アプリ上で再配備が必要なポートやポート外で駐輪された自転車に目印をつけ、そのポート間の移動やポート外の車体をポートに戻して頂いたお客さまに対して、インセンティブをお渡しています。

これにより、自転車の配備状態を自然と最適な状態に導くよう設計がされています。



SDGs Practice / つくる責任、つかう責任

自転車を愛してるからこそ！ ロングライフな自転車づくり

日本では年間 700 万台の自転車が輸入・販売され、その大半が短い期間で廃棄されています。使い捨て・廃棄が続く自転車のライフサイクルを、整備されたシェアサイクルにより改善していくことを目指します。

つくる責任。自転車の使い捨てを改善

シェアサイクル Charichari を運営する neuet では自社で自転車を設計、製造しています。個人所有の自転車と比べ、シェアサイクルの車体は一日の利用時間が長いいため、品質の高い車体の生産が必要になります。チャリチャリの自転車は安全性と快適性を担保しながら、車体をメンテナンスをしやすいように日々マイナーチェンジを続けています。



🚲 Ex-1 / サドル

シートの上げ下げの回数が多いシェアサイクル向けのシートクランプ（上げ下げをするためのハンドル）を使用しています。

シートシム（金属同士の摩擦を防ぐ樹脂）を入れシートポストが傷つきにくい構造に。



🚲 Ex-2 / タイヤ

約 5000km 走れることを想定した耐摩耗性タイヤを使用しています。通常のタイヤは 2000~3000km を想定されています。タイヤの使い捨てを減らし、多くの方に安全に乗っていただけるよう工夫しています。さらに英式バルブから米式バルブに変更し、空気が抜けにくくなり、チューブの耐久性の向上・パンクの減少に繋がります。



🚲 Ex-3 / フレーム

自転車の耐用年数を長くするため、ハイテンションスチールによるフレームを採用して、独自の設計を行っています。一般的なシティサイクルと比べ長期にわたる使用に耐えることができます。



SDGs Talk Session

チャリチャリを運営する neuet 株式会社代表家本が、SDGs へ取り組む企業のみなさんと共に持続可能な社会をどのように作っていくか考えるトークセッション。





SDGsに「気づく」 きっかけ作りをする企業へ

Collaboration

東海テレビ放送株式会社

小島浩資

代表取締役社長



Charichari

東海テレビと SDGs

家本 SDGsの取り組みについてお聞かせください。

小島社長 弊社は、SDGsという概念がまだ世の中にある開局の時から、地域の人たちに貢献するということをテレビ局の生業の中で行ってきました。新しいことを強く推進してきたわけではありませんが、60年以上SDGsに関することを行ってきた自負はあります。近年の取り組みを話すと、2年前に私が社長になった時、あらためて「社員の夢」を聴きたいと思ったのです。そこで「ネクストチャレンジ」という企画で社員の声を募集しました。短い募集期間だったにもかかわらず、100名以上の社員がメールを私に送ってくれました。良い意味で私の予想を裏切ってくれました。年末年始のあいだに内容を見たのですが、お休みが全て潰れるくらいの分量でした。

家本 ということは全て読まれたってことなんですね。

小島社長 集まった100人以上の夢は、楽しく読ませてもらいました。

家本 やることがトップダウンで降ってくるのではなくて、社員の皆さんから出てくるというのはなかなか簡単なことではないですね。

小島社長 社長や上司が伝えたことをやってもらうよりは、普段全然違う仕事をやっていたとしても、「自分がやるんだ!」と強い意志ある人が責任を持ち、提案してくれると良い結果に繋がると感じています。この取り組みを通して良い兆しが見えたので、2021年の年初に国連が取り組んでいるSDGメディア・コンパクトに登録しました。さらに、組織改革として全社横断的にCSR担当を設けました。

<SDGsの取り組み①>

職能を生かしたSDGsの取り組み

家本 さらに、ぜひ東海テレビさんの具体的なSDGsへの取り組みをお聞かせください。

小島社長 たとえば、当社の庄野俊哉アナウンサーは、昔から子供たちに読み聞かせの会をしています。また愛知教育大学では、将来教員を目指している学生さんに「喋ること」を教えています。相手に自分の想いを伝えること、わかりやすい音声で伝えることなど、アナウンサーの仕事を通じて得られた経験を大切にしたいという想いで活動してくれています。



<SDGsの取り組み②>

ペットボトルキャップの回収

小島社長 東海テレビの入口には、ペットボトルキャップを集める大きな箱があります。これを集めることで、途上国の子供たちがワクチンを打つための費用とすることができます。今までに、なんと5万個も集まりました。家からペットボトルキャップを集めて持ってきてくれる社員の気持ちを想像すると、私も嬉しくなります。

さらに意外なところにも成果が現れました。このプロジェクトを推進してくれた社員をはじめ、関わった人たちが生き生きとしている姿を多く見るようになりました。自分の行動が社会の役に立っていると感じてくれたことだけでなく、会社全体でSDGsを推進していると実感してくれたようです。

<SDGsの取り組み③>

地域からSDGsを考える！「ミライノニュース」

小島社長 テレビ局らしく放送を通じた取り組みも行っていきます。夕方のニュース番組では地元から「持続可能な社会」を目指す人々取材する「ミライノニュース」というコーナー企画を設けています。また「チョコレートな人々」というドキュメンタリー番組も放送しました。この番組に登場した「久遠チョコレート」という企業は、障がい者の人々を優先的に雇用しています。

立ち上げた夏目社長は、働きたくても、働く場所が限られ、安い賃金しかもらえない障がい者がたくさんいることに疑問を持ち、多様な人たちが活躍できる場所を作ろうと、会社を立ち上げました。小さな規模からはじまったそうですが、今では500人もの従業員を抱えているそうです。こうした、社会の課題に強い思いで向き合っている方々を放送を通じて応援していくことが弊社にとってのSDGsへの貢献です。



社員が自分の夢を語れる魅力的なテレビ局

家本 東海テレビの「ネクストチャレンジ」ですが、小島社長が夢を集めようと思われたキッカケをお聞かせください。

小島社長 東海テレビで「こんなことやれたら」と夢を持っていた社員はたくさんいると思っていました。そんな想いを吸い上げて、背中を押すことで、入社してよかったなど、ちょっとでも思っただけでいい。会社で働くなかで、モチベーションを維持し続けることは難しい。それでも、自分のやりたいことや夢を会社の中で実現したり、意見を言えることは、人の気持ちを支えるポイントだと思います。そういう機会が増えることでモチベーションが上がり、一人一人が明るく夢を語る社員であって欲しかった。この想いは昔から変わっていません。いろんな社員がいろんなことを考えて、夢を語れる魅力的なテレビ局や会社でいられるような取り組みを今後も増やしていきたいです。



小島社長に新車体の説明をする家本



東海テレビの情報番組「スイッチ！」のスタジオをお借りして対談。

家本 社長から社会に対してこういう会社であるべきだと言うのではなくて、実は「社員発信でできること、やれることがたくさんある」ということがキーワードですよね？

小島社長 上司から言われて行動することと、社員が自分からこういう活動がありますよと提案して行動してくれることには、圧倒的な違いがあります。そもそもやれと言ってペットボトルキャップの話なんか出てきません。上司部下関係なく、情報を集めて提案することが大事で、新しくなくても良い。どこかでやっていた「あれ良いよね」ということを取り入れることの方が重要で、良いものはマネして取り入れて良いのです。



東海テレビ x Charichari

この2社がシナジーを生むSDGsとは

社会に新たな「気づき」を伝える企業やサービスとして

家本 私たちは、チャリチャリ=SDGsへの取組みだと強引に結びつけるつもりは全くありませんが、コロナで社会環境が変わり、元の社会の姿に戻るのではなく新しい社会のかたちが変わっていると思っています。今回、御社にチャリチャリを応援していただくことになり、あらためて御社としてチャリチャリに期待すること、そして私がまだ見えていない視点へのご指摘などをお聞きしたいです。

小島社長 私もチャリチャリのアプリをインストールして体験しました。

誰にでも伝わる魅力としては、自転車を買わなくてもまちなかにたくさんポートがあり、乗り捨てできる便利なツールですね。

でも、私が考えるチャリチャリの魅力の根っこは、モノを大切にすること、そしてシェアリングの視点だと思います。例えば、飲んだ後のペットボトルは再利用することで資源化します。しかし、た

とえそれを分かっていたとしても分別せずに捨てるという環境破壊に繋がる行為があります。チャリチャリに乗った時に、自分はモノを大切にしているという気づきにつながるとよいと思います。便利であることや料金が安いということとは異なる別軸の付加価値として、「これは環境にも貢献しているんだ」という気づきや体験につながるサービスではないでしょうか。このようなイメージを共有していくことは放送局として得意なところ。地球全体として推進していこうとしているSDGsの文脈で、チャリチャリが世の中に新たな気づきを提供する存在として、一緒にアピールしていきたいですね。

家本 率直にこのご指摘は嬉しいです。「気づき」というキーワードは私たちも意識していきたいところです。一度体験していただくことで、「気軽に移動できるな」「まちの中にはこういう風景もあるんだ」「環境にやさしいな」と気づいていただけるはず。しかし、まだまだシェアサイクルをご利用いただくまでのハードルを下げられていない課題もあります。

小島社長 放送を通じてSDGsのことをいくら伝えても、見ている人がリアルに体験しないとわからないことはあるでしょう。みんなが身近なモノを大切にすること、そして街全体で自転車とは買って使えなくなったらすぐに捨てるというものではない、となっていくと、きっと次のステップに繋がっていくのではないのでしょうか。チャリチャリには、シェアサイクルの体験を通じて気づききっかけをつくる「カッコイイ」存在にもなってほしいです。社会の意識が変化する中、地域の放送局として、地域の視聴者の方々に「気づき」を伝える存在でありたいですし、共通のゴールをチャリチャリの皆さんと一緒に目指せると思い、応援しています。



東海テレビ放送株式会社 代表取締役社長

小島浩資

1958年12月生まれ。愛知県出身。名古屋工業大学卒。1981年東海テレビ放送入社。営業畑を歩み、2017年専務取締役、2019年6月に社長就任。趣味はサックス。

Iemoto's Memo

対談を終えて

「気づきを伝える役割に」という小島社長の言葉が印象に残りました。私たちは、放送を通じて情報や娯楽を得ているだけでなく、時として、社会で努力している人の姿、苦しんでいる人の姿などが自らの行動を変えるきっかけになることもあります。SDGsに取り組むことはテーマに沿うことを意識しがちでしたが、ご利用の体験を通じて社会全体が気づいていくという役割も担っていきたく感じました。

対談の最後に「スイッチ！」ポーズで記念撮影させていただきました。



SDGs 実践への第一歩は 「共感と行動のギャップを埋める」

Collaboration

株式会社丸井グループ

関崎 陽子

サステナビリティ部 部長



Charichari



株式会社丸井グループと SDGs

丸井グループのサステナビリティ思考

家本 丸井グループとして、サステナビリティに対する取り組み、その考えを発信されていると思いますが、特に直近のビジョンから伺いたいです。

関崎部長 丸井グループのサステナビリティの考え方の柱は「インクルージョン」です。

2009年と2011年に弊社は経営危機を経験し、弊社の商売の原点とは何なのかに立ち戻りました。それは、お客さまに寄り添い共感し、長いお付き合いの中で生まれる信用を共に作り、共に積み重ねていくことであり、すべての人が「しあわせ」を感じられる社会を共に創っていくことです。そして、「誰も取り残さない」という弊社が取り組むインクルージョンは、SDGsの考え方と合致していると思っています。弊社の社員は、誰かの役に立ち、喜んでもらうことが好きなピュアな人が多いです。だからこそ、「すべてのお客さま」や「インクルージョン」という言葉の本質を考え、各自の仕事に置き換えながら取り組みをすすめています。本気で「人が好き」と思える素敵な社員が多く、お客さまをはじめとした相手の本音を引き出すことに繋がっていると感じています。

す。

とはいえ、この取り組みを始めた頃は多くの学びがある日々でした。10年以上かけて、そうした企業風土を育ててきていると思います。まだ道半ばの部分も多く、たとえば、お客さまに弊社のサステナビリティを正しく伝え、お客さまと一緒に社会課題を解決していくにはどうしたら良いのか、これが今私たちが取り組みたい大きなチャレンジのひとつだと思っています。





<SDGsの取り組み>

生活に「なくてはならない」サービスを目指して

関崎部長 新規事業や新しいサービス・商品は、「あったらいいな」という想いだけではビジネスとして持続できませんので、生活に入り込み「なくてはならない」という存在になることが必要だと思います。だからこそ、チャリチャリやアイカサなどのシェアリングサービスがお店にビルドインされることで、お客さま自身が、「こんな選択肢があるんだ」という気付きを得て頂く体験を増やしていくべきだと考えています。

弊社はエポスカードや店舗を接点に、お客さまに最も近い場所で商売ができています。そのお客さまに、サービスや商品そのものがとても魅力的であり、かつ、社会に良く、環境にも良い、という新しい選択肢を提供できるかが大事だと考えています。ただ、弊社が単独でその選択肢を揃えることは難しいという背景もあり、今、スタートアップのみなさんとの協業を通じて、お客さまに様々な選択肢をご提案していこうとしています。チャリチャリさんの場合は、弊社の事業の選択肢になかった「移動」を扱う事業であったことで関心が集まりました。私自身はそれまでシェアサイクルを利用したことがなかったのですが、周囲に利用している知り合いが結構いたのです。その利用シーンを見たときに、どこに駐輪ポートがあるのか覚えた上で自由自在に移動しているな、と感じました。このように誰かの生活に入り込むことで人のライフスタイルが変わるんだ、と学びに繋がったと思います。

家本 御社の社内からのサステナビリティへの取り組みの具体的なアイデアはどのように出てくるのでしょうか



か?たとえば、Q-SUI 事業についてお聞かせください。

関崎部長 「サステナビリティにつながるビジネスってどんなことができるんだろう」と、チームの中で議論を繰り返す中でペットボトルのゴミを少しでも減らすことができなかと。のどが渴いた時に欲しいのは、ペットボトルではなくて中身の飲料水。そんな発想から始まったのが Q-SUI 事業です。とはいえ、課題はまだあります。サービスに共感してくれる方々も多く、インスタグラムのフォロワー数も 5500 人を超えたのですが、まだまだ利用していただく会員様が増えていません。当初考えた仮説と違ってしたのは、お客さまが給水するための行動動線が当初の想定よりも狭く、日常の移動の導線上に必要であるということでした。自宅の目の前にあるくらいの感覚でなければ利用されない。そういう仮説検証を繰り返しているという実態です。



社内の Q-SUI スポットで使い方を教えていただきました。



株式会社丸井グループ x Charichari - 未来の選択肢を増やす「共創」 -

企業の壁を超え、お客様にサステナブルな社会を

家本 御社との今後の未来でこんなことができるのは？というご意見があればお聞きかせください。

関崎部長 今、大事なトピックになっているのは、カーボンニュートラルやサーキュラーエコノミーだと考えており、今後、弊社が取り組むテーマの一つとして「将来世代の未来を共につくる」というものがあります。チャリチャリの強みは、CO2を出さない、自転車をまちの人たちで共有する、健康促進に繋がることなので、このテーマにマッチしています。チャリチャリ、アイカサ、Q-SUI のお客さまは、決して意識が高いから利用しているわけではなく、率直に自分の生活に親和性があるから利用している、と思っています。だからこそ、そのお客さまに、日常生活で利用している電気も再生エネルギーに変えてみるなど、ライフスタイルをさらに一段変化させる提案をすることで、可能性が広がっていくと感じています。

そういう母集団の方々にお互いのサービスを紹介し、サステナブルな社会を身近に体験してもらう

ことで、未来のライフスタイルの選択肢を増やすことができるかもしれません。身近な衣食住などの日常生活の中で新しい選択肢への気づき生まれ、それぞれのサービスがそのスタート地点として、生活の選択肢が広がり続けることを期待しています。そして、共感と行動のギャップを埋めるボタンを一緒に探したいと考えています。チャリチャリが1日1万回以上利用していただけるサービスに成長したそのプロセスの中に、必ずお客さまが習慣化できたきっかけがたくさん存在したと思っています。そのボタンが何かを見つけることで、弊社のサービスの進化につながると思います。

家本 私たちも、チャリチャリだけでは日常生活を全て担えるわけではないですし、そもそも一日の中では移動していない時間のほうが圧倒的に長いので、他サービスと連携することで生活への接点を増やし、ライフスタイルにアプローチすることはとても面白いと思います。

関崎部長 再認識したことですが、弊社は「お客さまに体験して頂く」という直接的な接点を既に持っていま

す。スタートアップの企業のみなさんからは、そうしたお客さまとの接点へのニーズがあるとお聞きします。そのお手伝いを丸井グループができるのではないかと考えています。当然、お互いビジネスとして成立させていくために、力を合わせる。真っ先に弊社を頼っていただける存在になれるような情報発信もしていきたいです。

この話は現在に留まらない話だと考えています。最近、とある高校2年生の方と話をすることがあって、その方は学生団体を立ち上げて地域で活動していました。その方に「今後どういことをしたいの?」と聞いたところ、「学生団体の壁をなくしたい」という予想外の返事でした。詳しく背景を聞いたところ、SDGsをテーマに活動している団体はたくさんあるが、いざ解決しようと思うと一つの団体だけでは解決できないことが多く、単体での活動に留めるべきではない、ということでした。自分の頭が固くなったなと感じつつ、このような場にも学びがあるんだと発見しました。そのような行動できる学生の方々がいざ社会に出てビジネスをやろうと思ったときに、パートナーとして選ばれる企業でなければ、と率直に思ったエピソードでした。私に限らず弊社の社員も、弊社が支援しているスタートアップの方々を通して同じような学びを得ていると思います。このプロセスがなかったら、そもそも「共創」という発想には辿り着けなかったかもしれません。自分たちが積み重ねてきたものに自信を持ちつつも、理屈に閉じずに学び続けることが弊社の変化の兆しだと社長の青井も信じているので、一緒に革新していきたいです。

家本 ぜひ私たちも学ばさせていただきます。



株式会社丸井グループ サステナビリティ部 部長

関崎 陽子

1998年入社。営業店での販売、広報室、婦人靴バイヤーを経て、金融部門でサービス商品開発、カード企画担当を務める。2005年より労働組合（マルイグループユニオン）専従役員。2017年北千住マルイ店次長、2018年より中野マルイ店長を務め、2019年4月より現職。

Iemoto's Memo

対談を終えて

チャリチャリの丸井グループさんの担当者がいつも言う「丸井さんらしさ」があります。この対談の帰り道でも「今日の話も丸井さんらしかったね」と真っ先に口に出るぐらいでした。どの社員の方にお会いしても感じることで、私たちのようなスタートアップの課題や困りごとに丁寧に耳を傾けてくださり、そこに何が出来るかを一緒に考えてくださる姿勢があります。対談中に何度も出てきた「インクルージョン」には、広く社会に対してはもちろん、新しいチャレンジに対しても受容し、課題に対して仮説検証を繰り返していこうとする皆さんの姿勢があり、「将来世代の未来を共につくる」ということに繋がるんだろうなと感じました。





SDGs Talk Session Vol.3

地球規模ではなく、
身近な地域にこそ SDGs はある

Collaboration

九州朝日放送株式会社

和氣 靖

代表取締役社長



Charichari

九州朝日放送株式会社と SDGs

家本 今回のテーマは SDGs ということで、九州朝日放送さんの SDGs の取り組み、意識していることをお聞かせください。

和氣社長 世界的な「持続可能な開発目標」に向けた取り組みは 2015 年にスタートし、この数年で急速に広く知れ渡ってきたと思います。弊社の取り組みは、SDGs という言葉が世の中に登場する以前から進んでいました。特に、地元に着した環境問題については、故郷の自然を守るために一人一人がどういう行動を取るべきか、という強い思いがありました。福岡は 1980-90 年代に深刻な渇水に直面し、水不足に見舞われました。その危機に直面したからこそ、私たちが真剣に考える必要がありました。水の問題は、水源となる山を考えなければいけない。下流の海のことも考えなければいけない。地元で起きた大変な事態に福岡の放送局として出来ることから始めたわけです。

<SDGs の取り組み>

25 年続く SDGs は、身近な地域から発想

和氣社長 その具体的な取り組みとして、1997 年に「水と緑のキャンペーン」をスタートし、現在まで継続しています。特別な日という意味では、夏から秋にかけての期間の一日を選び、ふるさとの自然や食、環境の大切さを伝えるというテーマで取材した情報を朝から夕方まで長時間のテレソン番組で紹介します。また、5月から半年間にわたる期間を通して、同テーマについて各レギュラー番組のコーナーで取り上げ続けています。さらに、「水と緑の基金」という募金活動も推進しており、視聴者の方に呼びかけて募金を募り、集まった募金は県を通じて地域のボランティア活動に活用いただいています。例えば、保存樹木の植林、学校現場での環境教育の取り組み、近年は豪雨や地震などの災害復旧に対する活動がありま



す。

この取り組みは25年目ですが、その歩みは、「海の豊かさを守ろう」「陸の豊かさを守ろう」という開発目標に通じるものがあり、国連が旗を振るSDGsという理念・コンセプトとも共鳴します。グローバルコンパクトは上から降って来るものではありません。私達は地域からの発想を下から積み上げて地道に広げていく動きをこれからも続けていくつもりです。弊社は一度始めたことはじっくり取り組むのです。「KBC オーガスタゴルフ」という地方の放送局としては大規模なスポーツイベントも半世紀近く続いています。私たちは「地域の皆さんに価値ある情報を届け続ける」というミッションを掲げています。環境変化に対応するのはもちろんですが、守り続ける心意気も私たちは大切にしています。

SDGsは2030年に期限を迎え、模様替えするでしょう。それがどういう形になろうと、私たちは独自の取り組みをこの地域で長く続けていくでしょう。

家本 世の中にあるチャリティで「水と緑」にフォーカスして四半世紀も長く続けているケースは、ほとんど耳にしたことがないですね。

和氣社長 長く続けると言えば、ラジオでの「チャリティー・ミュージックソン」もあります。視覚障害者への理解促進と思いやりの育成を図る目的です。これも1975年からニッポン放送などと一緒に続けています。



家本 四半世紀となると御社の中にいる社員もたくさん入れ替わると思いますが、社風のような芯の思想を若い方々が引き継いだり、世代に応じて変わるテーマを捉えて新しいものを発見していたりするのでしょうか。

和氣社長 記録を振り返ると、時代の要請を背に受けながら地道に取り組んでいると思います。近年は防災です。災害に強い地域でなければ、命と暮らしを守ることができません。ひとつのことを頑固にこだわり続けるだけではなく、新たなメッセージを付与することも当然考えています。例えば開発目標の「住み続けられるまちづくり」というコンセプトに沿って、地域を見つめ直すことで、多角的な視点を提示していく努力もしています。

弊社の根幹には、身の回りの問題を自分たちの手が届く範囲の地域社会に働きかけていくことがあります。メディアは地域に拠って立ち、視聴者、聴取者に「気づき」を提供していく。その地域での気づきが、地球規模の環境を考えることに繋がることを、息長く伝えていきたいと思っています。



九州朝日放送株式会社 x Charichari - SDGs の文脈で 2 社が協業する意味とは -

「住み続けられるまちづくり」に地域を巻き込むには？

和氣社長 変な言い方かもしれませんが、1 台の自転車の立場で考えてみましょう。1 日 24 時間の中では通勤や買い物などの限られた時間だけで利用されています。所有者 1 人のユーティリティは決して高くはない。シェアサイクルによって、1 日の中で 1 台の自転車が利用される時間が長くなるということは、価値を生んでいる時間も長くなるということです。車両としての寿命は当然ありますが、自転車 1 台にとっての一生のなかで、より多くの時間で人の役に立てたほうが自転車も嬉しいと思うのです。経済的に言うと、自転車 1 台あたりの稼働時間が長くなることで、自転車 1 台が生涯に生み出す価値も高まります。近年はモノづくりにかけるコストが減らされていますが、自転車の価値が上がることは、生産現場での自転車づくりが大切にされることに繋がります。自転車 1 台が効果的に利用されるようになれば、生産現場では一定のコストを掛けてでもユーティリティ性の高い自転車を開発・製造する動きに繋がるかもしれません。今の世の中は廃棄、頻繁なモデルチェンジによって初

期投資にかかるコストが減り続けています。シェアサイクルの可能性は、地域の中での有用性をより高めることで、「住み続けられるまちづくり」に寄与することにもなります。

もちろんルールなしに共有はできません。それでも、チャリチャリから協業の話の頂いたときに、共有することで限りある資源を大切にし、持続的に地域社会を発展させるという観点から、地元メディアとしての私たちのミッションにかなっていると思いました。

家本 福岡はコンパクトシティと呼ばれていますが、再開発によって住む地域も変化していますし、今後も人口が増え続けるはずですが、電動モビリティがこれから普及していくと思いますが、未来のまちにも細やかな移動手段である自転車は必要になるはずですが。その時、バス、地下鉄と同じような極自然な習慣で自転車を利用できる交通網が整備されていくと、まちの方々にとってはより住みやすく、今後のインバウンドでまちを訪れる旅行者にとっての貴重な移動手段として経済を持続的にすると考えます。

和氣社長 弊社がチャリチャリと協業した決め手は主に 3 つでした。「福岡を拠点とするまちづくりの事業であること」「環境配慮型かつシェアリングエコノミーという新しい社会を予感させること」「スマホを活用したビジネスモデルであること」です。自転車という乗り物の地域での可能性に魅力を感じました。シェアサイクルというネットワークサービスにどのような企業を巻き込み、共通の価値を創り出していくのがポイントです。地域の皆さんを巻き込むためにも開放的である必要性があります。

家本 「ネットワーク」「開放的」はキーワードですね。

和氣社長 メディアは地域とヒトを結びつける仲介役なので、チャリチャリの福岡展開でもお役に立てると考えています。番組でチャリチャリを紹介したときも、普段は見えないトラックに自転車を積んで再配置・整備するなど、裏方の地道な作業を取材させていただきましたが、メディアとしてもそういう姿が見える化されていくことに意義を感じました。今後も地域の皆さんに支持、理解される努力が必要です。放置自転車の問題、乗車マナーなどに加え、利用が増え続ければ事故も起きる。こうした課題に対しても、自転車を大事に乗ろう、運転に注意しよう、という気持ちを育てながら利用してもらうことで事故が減ると嬉しいです。

家本 頑張ります。



九州朝日放送株式会社 代表取締役社長

和氣 靖

1958 年生まれ。大阪市立大学文学部卒。1981 年朝日新聞社入社。西部本社経済部次長、ヨーロッパ総局員、名古屋本社編集局長補佐、デジタルメディア本部 WEB 編成セクションマネージャー、取締役などを経て、2012 年に同社常務取締役就任。2015 年九州朝日放送の専務取締役に就任、2016 年より代表取締役社長（現任）。

Iemoto's Memo

対談を終えて

所有からシェアへと進むことで自転車も喜ぶのではないかと和氣社長のコメントは、まさに我が意を得たりでした。まちの駐輪場で朝から夜まで留まり続けている自転車を見ていると、この子（自転車）はきっとよりたくさん使われることを望んでいるはずだと感じます。

「水と緑」を含め、KBC さんがなぜ取り組むのか一貫したお考えがあることも印象的でした。SDGs は決して 2030 年までの時限的なものではないことを考えると、歴史や背景から理由を明確にすることが地域課題に長く取り組む原動力になるのだとの学びをいただきました。

